

鷗外の妻 登志子

小道 周帆

明治二十三年九月十三日に長男が生まれました。主人は出産前の私を置いたまま、八月十七日から十一日間も信州山田温泉に滞在していたのです。何かを書くために家ではできないと考えたようで、身重の私や生まれてくる子には関心がなかったのでしょうか。

傍に居た母は

「林太郎さんは、一月に発表された『舞姫』の評判がいいので、何か集中するご用があったのでしょうか。私にはよろしくお願いしますと言付けがあったわよ」

と、いたわってくれました。

「でも母さん、その『舞姫』だけれど、あの人のドイツ女性との恋物語でしよう。それをね、私の前で朗読して聞かせるのよ」

「恐らく、お前を安心させるために、陰で読んで妬まないでくれよという意味じゃないの」

母は優しく言ってくれましたが、結婚以来、夫婦生活を大事にする人とは感じられず悲しい思いで過ごしておりました。ただ、子どもが生まれれば、家庭にも関心を向けるだろうと、少しは安心した気持ちも生じていました。

実家の赤松の家では、男爵であり皆から畏敬の念で見られていた父であっても、常に家庭を大切にしており、とりわけ母さんを大事にしておりました。その所為か子だくさんで、賑やかな家でした。それにあやかりたいと次の子も楽しみにしております。

一年前の明治二十二年三月十三日に中村楼で、子供の時から可愛がって頂いていた西周さんの仲人によって、二十七歳の森林太郎さんとの披露宴が行われました。十七歳の身で何も分からなかったものの、親の言うとおりの結婚で幸せになると信じておりました。

新居は森家で見つけて頂いた家で、弟の篤次郎さんが陸軍省に通う便利さとお嫁さんを迎えるからといって、下谷根岸金杉に新しく建った借家を

見つけてくださいました。そこには主人と篤次郎さん、潤三郎さんの三兄弟が一月から住んで、お兄さんのお嫁さんを迎えるのだと準備しておられたようです。ご両親は千住で医院を開業されており、そちらにお住まいでした。

男兄弟だけの家で新婚生活に入ったため、なんだか落ち着かない気持ちでした。主人もこれではまずいと私のことを思ってくれたようで、近くを通る汽車の騒音に我慢が出来ないと理由を付けて、恐らく篤次郎さんがせっかく見つけてくれただけに心配りをして、自分で改めて家探しをしていました。

私は家の件で母に相談したところ、

「妹たちが住んでいる赤松家の持ち家がかなり大きく、部屋数も多いので森さんの皆さんも一緒に住んだらどうかしら」

と言ってくれました。

場所は上野花園町十一番地で（注：現在の水月ホテル鷗外荘）、今の下谷根岸金杉よりは便利な場所ですので、どうかしらと話しました。主人は家探しをするのは苦手なようで、この話に渋々ながら賛成してくれました。初めからここにすれば良かったのにも思いました。主人としては赤松の家で住むと入り婿のような形になるから嫌だったのでしよう。

この家には主人の他に弟の篤次郎さん、潤三郎さん。そして私の妹登久子と加津子の六人の若者と一緒に住みました。それに赤松家の老女中お久さんも住み込んでくれました。お姫様育ちだったので母が大変心配して、手配してくれたのです。

赤松家は自慢するようですが、播磨の名族であり、昔から廻漕業を手広くやっており、父は江戸に出て旗本吉沢久之助の娘婿になり、幕府直参となった人です。その後、実祖父赤松泰助の姓を継ぎました。

幼少期から蘭学を学んでいたようで、十六歳の時には長崎海軍伝習所に派遣され、勝海舟さんとも親しくなったと話しておりました。その縁で、咸臨丸で渡米して、航海中の測量を担当したそうです。

西周先生とは幕府よりオランダ留学生として派遣された際にご一緒したそう、榎本武揚、林研海、津田真一郎さんも留学生仲間です。とりわけ西周さんとはそれ以来深いお付き合いをしておりました。後に父が『日本の造船の父』と呼ばれるようになったのはオランダでの開陽丸建造に当たっていたためです。その後もオランダに残留して造船学を学んでおりましたが、大政奉還を知り帰国しました。

幕臣であったため、徳川慶喜様の静岡藩に移り、そこでは藩の兵学校の教授方として西周先生らと教育に携わったと言っております。維新後は薩長閥が中心でしたが、学識・技術を担う人材がいなかったことから新政府に乞われ、海軍兵学寮に出仕しました。その後も新政府の中で持ち前の技術を基に栄進したようです。

なお、静岡藩時代には磐田原台地を開拓し、赤松茶園と言われる大規模な茶園開拓をしておりました。幕府の奥医師をされておりました林洞海さんも茶園開拓をされており、それが縁で林洞海さん次女の貞さんと父が結婚し、私が生まれたのです。

母の長兄は陸軍軍医総監林研海様であり、母の姉さんは榎本武揚様に嫁がれています。弟さんは西周様に乞われて西家の養子になっておられます。さらに辿れば、医学分野のエリート佐藤泰然様や松本順様にも繋がりがあります。そうした関係で、森家、とりわけ森林太郎の将来に役立つ、この上ない縁談だとして両親はお考えになられたのでしよう。

技術を持っている父の新政府での仕事で特筆すべきは、横須賀造船所長を務め、父と上田寅吉さんとで、外国人に頼らない日本最初の軍艦「清輝」「天城」「海門」「天龍」の四隻を建造しております。その後は海軍造船会議議長等を作り、その勲功により明治十六年には男爵を授かり、明治二十五年から大正六年までの二十五年間は貴族院議員を務めました。私はそんな父を尊敬しております。

そんな恵まれた環境の下で、赤松家のお姫様・お嬢様として大切にされ、幼少のころから国学・漢学を学び、長唄・舞踊・箏曲なども身に付けておりました。ただ身の回りのことや家事は大半が女中さんのお仕事で、家事はほとんどしておりませんでした。そこで母は結婚した際に赤松家の一番優秀な女中お久さんを含め三人もの女中さんを付けてくれたのです。

赤松家と森家の成り立ちや習慣、考えの違いから、神経質な主人からは女中のお久さん共々よく叱られておりました。

赤松家では何事も家長ありきだったことから、夕飯のおかずも家長と他の者とは違っております。それが気に入らなかつたようで、弟たちにも同じものを食べさせると、お久さんには厳しく言い聞かせておりました。みんなが同じおかずで夕飯を迎えるのには一理あるなと思えました。

食事については、ドイツで衛生学や細菌学を学んだ所為で、生ものは絶

対に口にしませんでした。果物さえ加熱しないと食べないのには驚きました。

風呂は細菌の温床だと言い、西洋ではシャワーとかいうのがあったそうで、その替りにお湯で身体を流しておりました。信州山田温泉ではどうしていたのでしょうか。

赤松家との決定的な違いはおお客様の数です。赤松の家では親戚以外の方が訪ねて来ることはめったにありません。来られる場合は事前に連絡があつて、お迎えする準備をしておりました。ところが主人は西洋のサロンとか申すものが好きで、我が家をそのサロンのように考えていたのでしよう。とりわけ根岸金杉の家に比べて格段に都心に近く、住居も広い上野花園町の家は、いろいろな人が来やすいようで、毎日のように文芸仲間の方々がやつてきます。皆さんは物事に拘らない自由人ということもあつてか、私共の迷惑なんて考えもなさらないようです。主人もまた、こうして談笑したり議論したりするのが大好きです。何時であらうとお客様を歓迎するので。そして夜遅くまで議論が熱し、騒がしい家になります。

こんなことがありました。

深夜にお見えになつた方がおられましたので、

「何か御用でしょうか」と申したところ、

「紹介状があるのかね」と申されました。

それを聞いていたのでしよう、主人が飛んで出てきて部屋に案内しておりました。翌日はこっぴどく叱られました。深夜に何の断りもなく訪ねてくるのは何か緊急の御用以外は私には考えられなかつたのです。

友人の文芸仲間が女中に

「今、何時ごろかね」と訊かれたので

「もう十二時を過ぎています」と答えたところ、

主人は

「もうとは何事か。十二時を過ぎたばかりです」となぜ言えないのかと叱つていました。

主人にとって夜中の十二時が遅いという観念はなかつたのです。睡眠時間は二、三時間で十分だと考えている人でした。

赤松の家に厄介になつてゐるのに、我がもの顔で時間に関係なく過ごされてゐるのに女中も困つており、私とよく愚痴を言い合つたものです。

なぜ、文芸仲間をこれほど大切にするのか私には解りません。勤務先の

陸軍の方が来られるのは仕事上のことでですから当然ですが、そんなことは殆んどありませんでした。我が家に来られるのは主人が創刊した文芸評論雑誌『志がらみ草紙』関連の仕事の方やその編集関係らしき方で、時間に関係なくやつて来られ、遅くまでおられました。

それに毎日のように来る人がもう一人いらっしやいます。お義母さまの峰子さんです。千住から人力車でわざわざ来られて、あれこれ細かなことまで、ご指示を頂いておりました。ただ家計のやりくりまで口を出されるのには閉口しました。

「お姫様気分で浪費が過ぎる」と厳しく諫められました。

私としては、お客様がこんな多くいらっしやるのですから贅沢なお菓子をを出しているのは事実です。それを浪費と言われたのには悲しい思いがしました。お姫様気分と言われましたが、とてもそんな気持ちで過ごせるような状況ではありませんでした。毎日、毎日落ち着かない気分でした。

金銭面のことでいえば、赤松の持ち家に住みながら家賃は森家から支払われたことはありません。さらに女中は合わせて三人おりますが、その給金は全て赤松家が負担しているのですよと、言いたいところでした。いずれも我慢、我慢の思いでした。

お義母さんは主人の名前林太郎から「林さん、林さん」と声をお掛けになり、親子での会話ができることに満足されています。来られる目的はこちらの方が強いように思います。主人も私と話すよりもお義母さまと話している方が楽しそうでした。反面、私の母・貞が妹たちの様子を見に来ているのをものすごく嫌がっておりました。母にしてみれば「私どもの家よ」「私の娘がいるのよ」との思いがあつたでしょうに……。

私は主人が父ともっと話をしてくれればいいのにと思っておりました。二人とも若いときに、父はオランダ、主人はドイツに留学していたのですから、お互いの状況などに理解しあえるのに……。そんなことは殆んどありませんでした。父は海軍、主人は陸軍だったので、それが影響していたのでしょうか。

それに仲人の西周さんとも会おうとしませんでした。主人は同郷だった関係で若いときに西家の書生をしていましたし、大恩人のはずなのに……。私との結婚を無理矢理進めたのを恨んでいるのでしょうか。

役所から帰ると、二階の書齋に引き籠り、夕食が終わるとまた書齋に向かいます。そうそう、主人が力を入れていたのは、西洋の詩を訳す勉強会

でした。よく存じ上げませんが、お見えになるのは井上道恭さんや落合直文さんとか申されています。それに弟さんの篤次郎さんも加わっておられました。時には嫁がれている妹さんの小金井喜美子さんもいらしていました。私は国学と漢学の知識は少しありましたが、外国語は全く理解できませんでしたので、蚊帳の外という感じでした。

喜美子さんのご主人は小金井良精さんで、ドイツに留学され解剖学の権威だと聞いております。ドイツ語が堪能だったことから、主人を追っかけて来たエリーゼ問題の解決に力を注がれた方で、主人も恩義を感じているようです。

その喜美子さんは気位の高い人で、いつぞや妹の加津子が主人の背中に飛びついたときには、
「私の大事な兄さんに馴れ馴れしくしないで」と妹を叱りつけたことがありました。それ以来、赤松家の妹たちは森家の方には近づかないようになりました。思えば私と喜美子さんの会話も用事だけでした。私がお客様のお茶出しをしても手伝おうともされませんでした。小金井家ではどんな振る舞いをされているのでしょうか。

長男の名前は於菟と名付けられました。私には一切相談はありませんでした。なぜこんな奇妙な名前かというと、西欧では有名な神聖ローマ帝国皇帝オットー一世から採ったようで、外国の方も発音しやすい名前だと言っておりました。その於菟は生まれてすぐに千住の乳母に預けられました。お義母さまのお知り合いの方なのでしょう。私は母乳で育てたかつたのですが、それは叶えられませんでした。

それだけではありません。於菟が生れて三週間後の十月四日には主人は弟さん二人と揃って花園町の家を出て行ったのです。いわば離婚宣言ということなのでしょう。

これは人間のやることではないと思います。主人が森鷗外として文壇でどんなに活躍していても、どんな立派な作品を書いたとしても、森林太郎は人間の心を持たない人です。産後三カ月の妻を置いて出て行くなんて、何という人なのでしょう。

今になって気付いたことがあります。出産前の八月十七日から十一日間信州山田温泉に滞在していたと聞かされておりましたが、そうではなくて、千住のお義母さまの所に行き、離婚と生まれてくる子の扱いを相談していたのに違いありません。それに加えて花園町の家を出て、どこに住むかの

検討もしていたのではないでしょう。余りにも突然でかつ準備よく出て行ったのですから……。私が悪阻で苦しんでいるときに、主人は離婚の準備を着々としていたのです。これが間もなく父親になろうという人の行いなのでしょう。子供を産むための道具としか私を見ていなかったとしか考えられません。人の命を守る医師とは到底思えません。

人づてに聞いたのですが、家を出て行き離婚へと進んだ理由について、文芸仲間に

「登志子とは気性が合わず、文筆活動の妨げになる」と語ったそうです。

主人の脳裏にはドイツから追いかけてきたエリーゼの面影を常に浮かべていたため、ことごとく私の容姿、振る舞いが気に入らなかったのだと思います。いわばエリーゼとの醜聞から逃れるために、西先生の薦める赤松家の私と結婚したのではないのでしょうか。悲しみより情けなさを感じています。

しかも新しい住まいは花園町の家から徒歩二十分程の駒込千駄木町五十七番地で、便利のいい借家を早々と見つけていたのです。この家は婦人科医中島襄吉氏のお父上が貸家として建てたものと後で知りました。当然、お義父様の医者仲間のお知り合いでしょう。ここでも今や憎さいっぱいの方子お義母さんが手回ししたのでしょう。(注：鷗外が永住した『観潮楼』はこの借家の近くの駒込千駄木二十一番地で明治二十五年一月に宅地を買い、新築の家を建てたもの)

本来であれば、赤松家の閨閥を頼りに、この結婚話に乗ったお義母さんです。ですから、

「林さんや、夫婦生活というのはいろんなことがあるもので、それを乗り越える努力も必要ですよ」とか、

「登志子さんとは大恩人の西先生が仲人をされたのですよ。軽々に離婚なんて言い出せませんよ」

と説得に当たるべきではなかったのでしょうか。

ところが、林さん可愛さに、何でも林さんのいうことを聞いて、このままの生活では息子がダメになってしまふ。何とんでも林さんを守らないといけないとお考えになったようです。子供を産んだ妻である私のことなど全くかまっておられない様子だったと母から聞きました。

「大変なお義母さまだよ。このままあなたが結婚生活を続けていても、い

ずればあのお義母さまと一緒に住むことになるのだから、今の苦労どころか一生お義母さまに林太郎さんを奪われてしまおうよ」
お父さんは

「そんなに出来の悪い嫁だというのなら、我が方で登志子を引き取りませよ」

と森家に厳しく言ったようです。

この破婚話を聞いた西先生は、陸軍の主人の上司石黒忠愍氏に主人の翻意を促すように斡旋を頼んだそうです。それでもいうことを聞かなかったのですから、森家は赤松家だけでなく、西家とも縁を切る覚悟をされたように思えます。

陸軍での評価も下がったようです。まずはドイツ留学時代の恋人エリィゼが来たことで、ひと悶着を起こしていました。そして鷗外としての文名が高まれば高まるほど、陸軍での重要な職務を担っているにもかかわらず内職に耽っているのではないかとか、職務中にも文学関係の仕事を隠れてやっているのではないかと疑われていたようです。それらに加えて、男爵家のまだ年端もいかない若い奥様と離婚するなんて、余りにも身勝手に異常ではないかとのことだったようです。

いずれにせよ、父も母も

「登志子、離別の覚悟をしましょう。森林太郎を見損なった」と、いうことになりました。

森家の離婚準備は万端で、主人が出て行った翌日にはお義母さんが早速動かれ、赤松家に来られたそうです。

「この度のことは、たいへん済まないことになり申し訳ありません。不甲斐ない親とお思いになりましたが、どうぞ許してください」

そんなしおらしい言葉の後に

「その代りに孫の於菟は私の命にかけて育て上げます」とおっしゃられ、嫡男は森家のものと宣言され、全く反論は出来なかつたようです。

お義母様が男の子の於菟を命懸けで育てようとされた背景は、森家は代々津和野藩の藩医でしたが、お義母様とお義祖母と二代続けて婿養子を迎えておられ、その入婿が藩医を務められたようです。それだけに男児である林太郎さまがお生まれになった時の喜びは大変なものだったと聞いております。その期待の林太郎の子が男の子の於菟だったので、何としても森家のものにしなくてはとの思いが働いたのでしょう。お義父様の静雄様は入婿であり、一切表には出られず、その名の通り静かな方で、一切をお

義母さんに任されている様子でした。

男の子ではなく女の子であれば、森家は引き取らなかつたでしょう。女の子であれば私の手元で育てられたのにと悔し涙にくれました。

明治二十二年三月十三日に結婚して、明治二十三年九月十三日に長男於菟が誕生し、その三週間後の同年十月四日に離別したのです。手続きの関係で正式離婚は明治二十三年十一月二十七日になっていきます。結婚生活は実質一年七ヵ月でした。十七歳で結婚して十八歳で離婚したわけです。

離婚した元夫が近くに住んでいるのには耐えられず、母の奨めもあつて、赤松邸のある遠州見付村に戻りました。広大な邸宅でお琴や三味線で気分を晴らしておりました。森林太郎のことは忘れるようにしました。幸いにも楽しいことは何もなかったのですから、すんなり忘れられました。それだけではありません。二度と会いたいとの思いも生じませんでした。

二、三年経って、父の部下の方のお骨折りで、海軍司法官の宮下道三郎さんと再婚しました。とつても真面目な方で、大切にしてください、長女美代子を授かりました。

森家のことはすっかり忘れておりましたが、世話する人がいて、森峰子さんと会う機会が一度だけありました。於菟が小学校に入った頃のようにですから、離婚して六年ほど経っていたのでしょうか。根津権現の茶店で会いました。

「当時は何も分からぬままの振る舞いで林太郎様に疎まれてしまいました」と、まずはしおらしく話しました。

「過去のことですから仕方がありませんね。あなたも今や他家の奥様、お身体を大切にね。於菟は私が責任をもって面倒見ておりますからご安心ください」

「何の心配もしておりません」

「一度、顔だけでも見てみますか」

「いいえ、会いましても子供のためにはなりません。あなた様が親代わりですもの。それに私にも子供がおりますので、何のお気遣いはいりません。それではこれでお別れしましょう」

「そうですね。ではご機嫌よう」

こんな淡々とした会話だったように思います。於菟は私の産んだ子ではありませんが、すぐに引き離されておりますので、愛情も何も感じません。於菟にしても母親の実感はないはずです。これでいいのです。私は森家と

は関係のない宮下家の妻ですもの。森峰子さんほどではないにしても強く
なつたものです。

二十八歳の頃、風邪をひいたと思っておりましたところ、胸が息苦しく
なり、肺病だと診断されました。療養するには空気の良い遠州見付村がい
いと考え、実家で過ごしておりました。一向に回復する様子もなく、死を
覚悟いたしました。

「静かに未知なるところへ旅に出たい。私の死は森家には知らさないで」
と消えゆくような声で精いっぱい申しました。

完

(8170字)

《参考文献》

- | | | | |
|-----------------|---------|------|------|
| ・『鷗外・五人の女と二人の妻』 | 吉野俊彦 | 1994 | 文藝春秋 |
| ・『鷗外の坂』 | 森まゆみ | 1997 | 新潮社 |
| ・『鷗外と女性』 | 金子幸代 | 1992 | 大東出版 |
| ・『鷗外追想』 | 宗像和重 編 | 2022 | 岩波文庫 |
| ・『鷗外・逆境の人間学』 | 吉野俊彦 | 1983 | グラフ社 |
| ・『旧赤松家だより』 | 旧赤松家記念館 | 2017 | 磐田市 |